

機関番号：12601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720103

研究課題名（和文）構文拡張における人称代名詞の非指示化と非現実ムードの関係性について
研究課題名（英文）On the relations between non-referentiality of personal pronouns and irrealis mood in Chinese

研究代表者

小嶋 美由紀（KOJIMA MIYUKI）

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：10431777

研究成果の概要（和文）：

現代中国語の三人称代名詞は、ある特定の構文（二重目的語構文及び使役構文の拡張構文）において非指示的な用法を持つ。この非指示的な三人称代名詞は命令文や条件節といった未実現の事態、つまり非現実ムードを表す文にのみ生起するという特徴を持つ。本研究は、形式と意味の結びつきである構文を文法の基本的単位とみなす構文理論（cf. Fillmore 1985、Goldberg 1995、Croft 2001 など）に基づいて、i) 三人称代名詞の非指示化現象の分析を試み、ii) 三人称代名詞の非指示化とムード制約との相関関係を探り、iii) この相関関係が「授与」の意味を動機づけとする構文拡張によって生み出されたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Third person pronouns in Modern Chinese have non-referential functions in certain constructions like extended double object and causative constructions. One crucial characteristic of these third person pronouns is their restriction to such sentence types as imperatives and conditionals, generally characterized as having irrealis force. The present study examines the mechanism in which third person pronouns lose their ability to refer within the framework of Construction Grammar (cf., Croft 2001, Fillmore 1985, Goldberg 1995), which posits constructions, i.e., form-meaning pairings, as basic linguistic units, and argues that there are interesting correlations between the loss of referentiality of third person pronouns and the constraint on mood (i.e., irrealis) observed in sentences they occur in. Further, it is claimed that the loss of referentiality and the mood constraint are an outcome of constructional extension motivated by the meaning of giving or transfer inherent in the double object and causative constructions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：言語学、中国語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：構文理論、人称代名詞、非指示化、非現実ムード、意志性

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、中国語における非指示的な三人称代名詞の存在は、中国語学界においても周知の事実であった。しかしある特定の構文において、モノや行為の受け手を表す三人称代名詞が、構文の拡張に従って指示性を失う事実、非指示性とムードとの関係を指摘した研究はほとんど見当たらなかった。また、ムード (mood) という文法範疇はインド・ヨーロッパ言語などの動詞の形態変化 (屈折) の一現象であると一般的に考えられているため、孤立語である中国語の分析において、ムードの差異はあまり注目されてこなかった。しかし、中国語の非指示的な三人称代名詞が用いられる文は、インド・ヨーロッパ言語において典型的に接続法 (subjunctive) が用いられる文タイプと類似している。この事実から、動詞の形態変化がない中国語における現実 (realis)、非現実 (irrealis) の区別をする手段の一つとして、「構文」を考える必要性を提唱することが動機となった。

2. 研究の目的

本研究は、形式と意味の結びつきである構文 (construction) を文法の基本的単位とみなす構文理論の考え方に則り、主に中国共通語における二重目的語構文と、中国諸方言の一つである台湾閩南語における授与使役構文 (動詞連続構文の一種であり、授与動詞から派生した被使役者マーカを用いた使役文) を取り上げ、これらの構文の拡張 (構文拡張) を考察する。この拡張をもたらす動機、及び拡張に伴ってうまれる制約 (モノや行為の受け手を表す人稱代名詞が三人称代名詞に限定され非指示化、非現実ムードを表す文のみ生起し現実ムードを表すことができない) の要因を解明することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

2で述べた研究目的のために、以下三つの作業を行った。

- (1) 中国語における二重目的語構文、授与使役構文と同様の拡張が見られる他の言語 (英語、タイ語) を考察することによって、その共通点と相違点から各構文の拡張の根底に存在するメカニズムを探る。
- (2) 受益構文は、構文のスキーマ的意味に「授与」を含む点で二重目的語構文や授与使役構文と共通している。しかし、受益構文では、受益者を表す一人称単数代名詞の指示性が弱まり、命令文としての

機能を獲得するといった拡張が見られる。この拡張のプロセスと、(1)で考察する二重目的語構文、授与使役構文の拡張との性質の違いを探る。

- (3) 中国語の諸方言の一つである粵語や上海語には、構文のスキーマ的意味に「授与」が含まれない処置構文、主題化文といった構文の文末に三人称再述代名詞が用いられ、非現実ムードのみを表す現象がある。これと、二重目的語構文、授与使役構文の拡張に伴う三人称代名詞の非指示化及びムード制約との間に存在する共通のメカニズムを探る。

4. 研究成果

年度別に述べる。

(1) H20 年度

H20年度は、中国語 (共通語、諸方言を含む) の二重目的語構文 [N1+V+N2+N3] (N1はN2にN3を与える) と授与使役構文 [N1+VP1+GIVE+N2+VP2] (N1はVP1することによってN2にモノ (や行為) を与え、N2にVP2させる) について、これらの構文がスキーマ的意味に含む「授与」に着目し、授与が表す強い意志性及び行為実現に対する高いコントロールが、これらの拡張構文が非現実の文脈、特に話者の強い意志を表す発話行為に用いられる動機になっていることを主張した。しかし、授与を表す文全てに非現実ムードの制約がみられるわけではないことから、授与がムード制約を生む唯一の条件ではない。もう一つの重要な条件は、授与行為の受け手 (着点・終結点) である三人称代名詞の非指示化であり、これは共起する動詞の意味タイプや第二目的語 (直接目的語) との相互作用によってもたらされるのである。このような授与を表す構文の拡張現象は、他言語 (英語、日本語、タイ語) においても見られ、本研究者は、これらの言語についても調査し、上述の中国語に関する考察結果の妥当性を確認した。

本研究の研究成果は、従来の研究では見過ごされてきた拡張構文が非現実性を帯びる要因を、授与意を含むスキーマ的意味、及び受け手の人稱代名詞の非指示化との関連で分析した点で評価に値すると考えられる。

(2) H21 年度

H21年度は、中国諸方言である粵語 (広東語) や上海語において、三人称再述代名詞 (resumptive pronoun) を含む文が非現実

ムードの事態のみを表す（徐烈炯・邵敬敏 1998、Man 1998）という事実注目し、授与をスキーマ的意味に含む中国共通語の二重目的語構文、台湾閩南語の授与使役構文の拡張に伴うムード制約との比較を行った。

再述代名詞は、1)動作主が既存の動作対象に意図的に動作行為を行い、2)それにより動作対象に状態変化を及ぼすという強い他動性を持ち、3)動作主側から動作対象を「どうするか」に焦点をあてて行為指向的に事態を述べる、という特徴を持つ構文で用いられる。これらの特徴はムード制約と共に、二重目的語構文と授与使役構文の拡張構文にも見られる特徴である。また、二重目的語構文と授与使役構文の拡張構文における非指示的な三人称代名詞と三人称再述代名詞は、選択的、つまりそれなしでも文は成立するという点において、余剰的である。

以上のような共通点がある一方、再述代名詞を含む構文と、非指示的な三人称代名詞を含む二重目的語構文や授与使役構文の拡張構文は、以下の点で違いが見られる。

違いその 1)二重目的語構文[N1+V+N2+N3]や授与使役構文[N1+VP1+GIVE+N2+VP2]の拡張構文に見られる非指示的な三人称代名詞は、動作行為による影響の「受け手」を表す N2 に生起するが、これは動詞の必須項ではない。つまり、話者は必ずしも埋める必要がない N2 のスロットに、わざわざ非指示的な三人称代名詞を挿入することによって、二重目的語構文や授与使役構文の形式をとり、その形式に結びついた授与の意味を獲得している。その授与の意味が結果的に強い意志性を表す要因になっている。一方、三人称再述代名詞は、文末に生起して強い意志表明や命令を表すが、授与を表す二重目的語構文や授与使役構文の拡張構文に見られる非指示的な三人称代名詞とは異なり、構文のスキーマ的意味を喚起することが動機とはなっていない。

違いその 2) 二重目的語構文や授与使役構文の場合は、N2 に挿入された三人称代名詞が非指示的である場合にのみムード制約がある。つまり、それが指示的である場合にはムード制約はない。一方、粵語や上海語の三人称再述代名詞は、指示的（動作対象を表す名詞句を先行詞とする）、非指示的（自動詞の後に置かれる）に関わらず、ムードが非現実限定される。つまり、三人称代名詞の指示性とムード制約との間に直接的な相関関係はない。しかし、(事物を指示する)三人称代名詞が通常は生起しない動詞直後の目的語に再述代名詞が生起する点で有標であ

る。本研究の研究成果は、従来見過ごされてきた非指示的な三人称代名詞を含む異なるタイプの構文に共通する意味的特徴及び相違点を明らかにし、更にそれぞれのタイプの異なる成立過程を明らかにした点で評価される。

(3)H22 年度

H22 年度は、中国標準語において授与動詞から機能語化した“給”を含む受益構文 [N1+給+N2+VP] (N1 が N2 のために VP する) の拡張現象に見られる、人称代名詞の非指示化とムード制約の関連について考察を進めた。

[N1+給+N2+VP] という形式は、受益、使役 (N1 は N2 に VP させる)、受動 (N1 は N2 によって VP される) という異なる意味によって 3 つの構文に分けられる。これら 3 つの構文のうち、強い叱責口調を伴う命令文に用いられる構文 [你给我 VP] (例:你给我闭嘴! 「黙れ!」) は、次のような統語的、意味的根拠に基づいて、受益を表す [N1+給+N2+VP] から派生したものであると認められる。第一に、命令構文 [你给我 VP] の主語名詞句“你”は受益構文における主語名詞句同様、動詞句 VP が表す行為の動作主である。一方、使役構文や受動構文の主語名詞句は動作主ではない。第二に、被命令者が命令された行為を遂行することが命令者の願いを叶えることを意味し、話者の利益と繋がることから、受益表現と命令表現の間には概念的な結び付きが認められる。[N1+給+N2+VP] は、N1 があらかじめ設定された目標 (受益者) N2 に対して動作行為を行うことを表す行為指向的な特徴を持つが、この特徴も命令構文への拡張を促した一要因と考えられる。この拡張は、他の受益者マーカーを用いた [N1+为+N2+VP] や [N1+替+N2+VP] には観察されないことから、拡張に伴う非現実ムード範疇への制限に、“給”が持つ「授与」の意味が重要な役割を果たしていると考えられる。

本研究は、「授与」を構文の意味に含む点で二重目的語構文や授与使役構文と共通する受益構文の拡張過程を考察することによって、その共通点を明確にすると同時に、受益構文独自の特徴をも明らかにした点で、中国語の人称代名詞体系とムード体系、更には両者の相関関係の解明に寄与したといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 小嶋美由紀、拡張的二重目的語構文“玩儿
他个痛快”の成立動機とメカニズム、中国
語学(日本中国語学会誌)、査読有、256
号、2009、122~140頁。
- ② 小嶋美由紀、上海語と粵語における再述
代名詞と非現実ムード、言語情報科学(東
京大学大学院総合文化研究科)、査読有、
8号、2010、33~48頁。
- ③ 小嶋美由紀、受益構文[N1 给 N2+VP]
から命令構文[你给我 VP]への拡張、現
代中国語研究、査読有、第12期、2010、
50~58頁。

〔学会発表〕(計1件)

- ① 小嶋美由紀(2008)「非指示的な三人称代
名詞が生起する動機及び構文特徴」、日本
中国語学会第58回全国大会、京都外国語
大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

小嶋 美由紀 (KOJIMA MIYUKI)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研
究員

研究者番号：10431777

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし